

ICNインターナショナル・アチーブメント・アワード受賞 世界の看護界が認める 革新的な貢献



石川県立看護大学 副理事長・学長
東京大学名誉教授

さなだ ひろみ
真田 弘美氏

石川県金沢市出身
聖路加看護大学卒業 金沢大学医学博士
アメリカ合衆国イリノイ大学看護学部大学院(研修)
Fellow of the American Academy of Nursing (FAAN)
Curtin University Adjunct Professor (Australia)

聖路加国際病院や金沢大学附属病院に勤務
金沢大学医療技術短期大学(後の医学部保健学科)
助手、助教授、教授を経て東京大学教授に就任
東京大学健康科学・看護学専攻長、学科長、グローバル

ナーシングセンター長(初代)の他、前日本看護科学学会理事長、前看護理学会理事長(初代)、元日本褥瘡学会理事長などを歴任
2022年 石川県立看護大学学長就任
2024年 防災士資格取得

2024年、2025年連続で「世界トップ2%科学者」に選出
2025年「ICNインターナショナル・アチーブメント・アワード」受賞

2025年6月、石川県立看護大学・真田弘美学長が「ICNインターナショナル・アチーブメント・アワード」を受賞されました。世界で12番目、日本人として初の受賞となる快挙を成し遂げ、看護界に革新をもたらす推進力への期待がさらに高まっています。

過去の業績のみならず 今現在の活動も評価

1999年創設の「インターナショナル・アチーブメント・アワード」は、ICN(国際看護師協会)とフロレンス・ナイチンゲール基金によつて2年に1度選ばれる賞です。受賞者がいない年もあるなかで、日本人として初めて受賞できたのは大変な名誉なこと。私たち看護師にとつて、フロレンス・ナイチンゲールに由来する賞をいただけるのは何よりもうれしく、「生きてよかった」と思う出来事でした。

賞の選考では、研究だけでなく、研究と教育・実践をつないで活動したか、看護の現場の変革に貢献したか、が問われます。私の活動においては、褥瘡(床ずれ)ケアに関する研究・実践・政策的活動に関して世

界の看護のモデルとなったこと、看護と理工学・医学及び産業を連携した「看護理工学」という分野を創出し、イノベティブな活動を展開したことが、高く評価されました。

さらに、この賞には「Alive(アライブ・生きていく)」という最優秀される評価基準があります。つまり、過去の業績だけでなく、現在の取り組みが重要視されるのです。この点においては、能登半島地震の被災地に最も近い大学の学長として、今まさに「災害支援活動」に取り組んでいる真つ最中であり、今後への期待を込めて選んでくださったのではないかと思います。

受賞は私にとって大きな喜びですが、それに浸っているわけにはいきません。まだ山のようにやりたいことがあります。「道半ば」の思いです。尊敬するナイチンゲールが「新しい世界への道を開くために波間で命を落と

しても、岸边で何もしない者でありたくない」と語つたように、協力してくださる皆様とともに、あらゆる人々の健康生活の向上のために前進し続けています。

次時代を見据えて 種をまき、育てる

私の長年の看護研究者としてのテーマは、患者さんが辛いこと、医療従事者が仕事にエンゲージメントできることです。2025年秋には、テルモと共同開発した、日本初の留置針型ミッドラインカテーテルが販売開始されました。点滴の液もれを防ぐために独自開発の「3D



「もれにくい点滴カテーテル」日本初の留置針型ミッドラインカテーテル「サーフロー Midela」



針」を使用し、画期的な「もれにくい点滴カテーテル」を実現。今後多くの病院に普及し、在宅医療にも活用される見込みです。

その他にも、貼るだけで生化学検査ができるパッチや、認知症発見バイオマーカーなど、簡便に患者さんの状態が判断できる様々なツールの開発を進めています。また、高齢者の「幸福寿命」を伸ばすために、寝たきりにならないように排泄・睡眠・食事ができるベッドと二体型の「AI車椅子」の開発にも取り組んでいます。

ツールが発達する一方で、看護師の仕事も幅広くなり、存在感を増しています。ところが、先の能登半島地震では、災害・防災の基礎知識を持つ看護師がいなかったことを痛感しました。「いないなら育てる」が私の信条。2025年4月には、石川県の寄附により日本初の「災害実践看護学講座」を開講。同講座では、災害実践看護に特化したカリキュラムで地域振興や健康支援までを考え支援できる看護職を育てていきます。